

## 第 23 回日本 IVF 学会広島開催における大会長としての感想・コメント

- 1) 2020 年 10 月 31 日—11 月 1 日に広島で開催された第 23 回日本 IVF 学会大会長の広島 HART クリニック理事長・院長の向田哲規です。今回の第 23 回日本 IVF 学会を主催する広島 HART クリニックは前院長の高橋先生が民間外来クリニックという医療形態において、日本で最初に体外受精を行う施設として 1990 年に開設され、この 10 月で 30 周年を迎えました。この節目に大会長としてこの学術講演会を主催するのはとても意義深く名誉なこととなりました。2020 年に開催を企画された学会・研究会の多くは 3 密を避けるためほとんど Web や Zoom での開催となっていますが、大会長としては日本 IVF 学会学術講演会の開催意義を考慮し最初から OnSite 開催を企画し、多くの参加者に来ていただき成功裏に終了しました。北は北海道から南は沖縄まで、登録参加者 231 人の方々が日本全国からこの状況にもかかわらず、地方都市である広島まで参加するという英断をし、参加していただいた皆様に大変感謝しております。
- 2) 今回の 23 回大会の大会長を務めることを、森本義晴現名誉理事長から申し付かったのは、2017 年に米子で開催された受精着床学会の期間中でした。2020 年は東京オリンピックが開催されるので東京、大阪の日本の中心都市は海外からの訪問者やそれに合わせたいろいろな催しがあり、会場や宿泊、移動の手配が大変になるので、「広島開催にしましょう」と指示を受け、その時は「出来るのかな？」と塩谷先生に不安な思いを相談した記憶があります。それから、古井先生が企画された名古屋での 21 回大会、蔵本先生が企画された 22 回大会を参考にさせて頂き、何とか今回の 23 回大会にたどり着きました。これは日本 IVF 学会事務局の方々、広島 HART クリニックの情報処理部門を中心とした全スタッフの献身的な協力無くして OnSite 開催は成し得なかったと思います。関係各位に大変感謝しております。
- 3) 今回のテーマである、新時代の ART 医療とは？ Ultimate ART for New Era と題して、次の世代へ向けての AI や PGT を極めた究極の ART 医療の展望を Discussion する会を当初は目指しましたが、その後 ART 医療を取り巻く状況は他の医療と同様に大きく変化し、新型コロナウイルスを経験した新時代、また不妊治療の保険適応が菅政権から提示され、それが実現すると財政的にも新時代になりつつあります。
- 4) 今回 OnSite 開催にどのような Program にするか考える際、実際の ART 医療に携わる方々やそれに関連する分野の第一人者からの講演を聞き、現在の ART のフロントラインを知るのが限られた時間の中では一番重要と思いました。そのため、生殖医療に関連する基礎的研究では第一人者で広島大学に在籍されている島田先生から精子運動における代謝経路の説明とその共同研究者で先日オーストラリアから留学を終えて帰国された梅原先生から卵巣間質の血流を改善するための抗酸化剤の効果についての講演がありました。また生殖医療に関連する周産期超音波検査、染色体分析などの世界的第一人者である夫律子先生から、究極の胎児画像診断と絨毛検査との組み合わせからより早期に胎児異常を見つけ出す最先端の話を拝聴しました。日産婦 PGT-A 臨床研究のスキーム作りをされた桑原先生から臨床研究が実際に運用されて半年たった段階での評価や今後の方向性について講演がありました。臨床エンブリオロジストとの共催では ART Labo に常に興味を持ち続ける当方が一番 HOT なテーマと思っており、ガラス化の次に今後世界に広がっていく Second Generation の顕微授精法である PIEZO ICSI について複数

の胚培養士から経験を聞き、その総括に県立広島大学の名誉教授の堀内先生から PIEZO の基礎的原理の話があり、今後の更なる展開が予想できる内容でした。日本 IVF 学会には Nrs や事務部門に携わる医療関係者も多く参加しているので患者のメンタルな部分を臨床現場 20 年以上の経験で知っている平山カウンセラーから医療者向けに、日頃の臨床対応について実際のノウハウを含め説明がありました。海外からの講演はこの状況です。VIDEO Presentation となっていました。AI と Time Lapse Cinematography (TLC) について Simon Cooke から今後の TLC の方向性示す有益な話がありました。また Budapest 在住のタイムラプス機器である PrimoVision の考案者である Csaba から、PIEZO ICSI を世界に広げていくためには Environmental Toxic に成り得るフロリナートから全く無害な画期的な化学物質である PNFO へ変更する必要がある話がありました。午後には今後の日本の ART 医療の方向性とのことで、当方の ART 医療の師匠ともいべき存在で今の自分の方向性を形作って頂いた福田先生、塩谷先生、吉田淳先生からそれぞれの先生の臨床経験をもとに示唆に富む話を頂きました。その座長にはいつも懇意にして頂き ART 医療の仲間ともいべき存在の渡邊先生、古井先生、古賀文敏先生に対応して頂きました。

- 5) そして、今回日本 IVF 学会を大会長として広島で開催するにあたって、何か Impact のある講演を学会の最後に用意したいと考えました。それで一番先に思いついたのは自分を含めた医療者にとって一番重要なのは Communication で、医療は医師と患者、医療関係者同士の適切な Communication 無くしては成り立たない業務です。日本で物事を伝えることが最も上手なのは？と思った時、以前、高田明氏の「伝えることから始めよう」を読んだことがあり、なぜ高田明氏が商品を提案するとあれだけの視聴者が購入する気になるのか？販売しようとする商品の魅力をいかに伝えるかの技術だけではない、何かがあるのでは？と考えるに至りました。それで、あのジャパネットたかたの創業者である「高田明」氏に講演を依頼することを決め、1 年以上前から講演依頼し、最初は鄭重に医療関係方々へ役に立つ話が出来かどうか？と断られました。しかしその後、日本 IVF 学会は不妊治療を真摯に行う職能集団であり、その方向性を説明させていただき、Zoom 会議での説明も行い、最終的に来て頂く形での講演に結び付きました。そして「伝わらないのは、無いのと同じ」という信念を持ち、高田さんの座右の銘である「夢持ち続け日々精進」という題名で 90 分間、全く聴衆を飽きさせることなく起承転結の流れのごとく講演をされました。自身の生い立ちから、ジャパネットでの苦労話、最後には非言語で伝えることの重要性を話され、とても感動しました。当方は高田さんの著書を幾つか持っているのですが、それにサインと一言を書いて頂きましたが、「夢持ち続け日々精進」も題名のごとくありました。しかし最も感銘を受けたのは「人は、人のために生きてこそ、人」という、人生の意味を表す言葉でした。高田さんか世阿弥に共感し、その哲学を学んでいるからこそその言葉と思いました。
- 6) 最後に大会長としてこの第 23 回日本 IVF 学会は、広島 HART クリニックの全 Staff および学会事務局の皆様、学会サポートのリンケージの方々、参加者、企業展示の皆様のお陰でこのような盛況な学会になったと思ひ、大変感謝しております。参加者にとって有意義な学会参加になったことを祈念して大会長の感想とさせていただきます。